

白金蔭

十二月



平成23年12月発行 第10号

白金葭月例句会案内

月例句会報(11 / 12 / 16 9名 欠投句五名)

一月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第五学習室) 兼

題新年一般 新年会 17:00 ~ 19:00 (備前にて)

二月十七日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題:建国記念日、公魚

三月十六日 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第五学習室)

兼題:蜥蜴出づ、牡丹の芽

新年一般の参考句 (一月二十日分)

遠方に富士くつきりと恵方道

高橋和子
瀧美千江

乱れし国の修正液ほどお降りす

志村宣子

鏡餅産湯を使ふこと丸め

後藤章

俳句など書いてつまらぬ賀状来る

高橋淳一

へんぱんと舞ぬ日の丸大旦

青木月斗

元旦や暗き空より風が吹く

吉田十二

砂時計音なく落ちる元旦に

中村堯子

あらため鍋持ち上げる力かな

久保内美清流

人間でいたら来た来たお正月

三橋敏順
磯野莞人

女坂箱根駅伝男坂

初日いま橋円核爆発あるな

大初日一人ひとりが受けて佇つ

煤逃げのばつたり隣る 醬付
かぶりつき

ゴンドラを唄ふ そめがみ
辺髪十一月

積読の壁のいつまで古暦

風呂吹やうかぶ山河の佇ひ

増田陽一

風呂吹や月蝕既に進みをり

増田陽一

菱食の便りもありて古暦

増田陽一

蝕の月赫くオリオン纖かりし

増田陽一

優先席マスクの白く浮びをり

増田陽一

雪降れり「憂鬱の魚」頭を揃

増田陽一

マチュピチュの写真残して古暦

増田陽一

久遠順

増田陽一

増田陽一

増田陽一

増田陽一

増田陽一

増田陽一

増田陽一

飯田孝三

風呂吹や窓の曇りも温かし

古曆今年よき事何と何

葱買ひて優先席も空いてをり

古曆予定書き込み少し減り

風呂吹やヒッグスしやつくり NHK

宿坊の風呂吹大根大きかり

月蝕を冬の一等星囲む

桔蓮の淵のさざなみモアレ出つ

皆既月食明けて初霜下総は

陸前はあの日のままの古曆

湯の宿の風呂吹海老の色添て

二度三度百会に止まる冬の蠅

聖護院なる風呂吹を大皿に

黒田彰一

冬の暮塔婆傾ぐや寺領塙

独り居の偽り残る古曆

朝ばらけ沼地這ひたる霜の声

核家族書き込み多き古曆

冷めてから風呂吹つつく飲んだくれ

光成高志

風呂吹の熱々なるを吹いて食ふ
数日や明日待たるるわらべうた

をみならの黒き靴下降誕祭

いつまでも刺さる棘あり開戦日

古曆いまだ明日を残したる

光 みち

塙田空華

杉浦弥栄子

風の日は酒と風呂吹猫友に
古曆風に吹かれで所在なし

。ベン持ちて書くもの忘る年の瀬や

小春日の里は静かに鐘響く

冬陽浴び桜老木鮮化粧

古曆老子の言へる芻狗すうくなり

小山陽也

吊されて塩鮭乾ぶ越の国

里踊りしまひて帰る冬の橋

加賀干菓子炬燵に食めり女客

吉羽多美子

柿よりは米に群がる雀らは

年末のクラフト今年もできそこない
ふとん干す上にかまきり日向ひなぼ

雨戸開け八ツ手の黄葉と寒椿

青木啓泰

風呂吹や少し暗めの厨の灯

喪の家の裏口を問ふ柚子たわわ

冬の河一気に渡る大鳥

味噌汁を少し濃い目に師走かな

その中に兄の死のあり古曆

しろみそら

無残やな土間に三日さんじの古曆
風呂吹や味噌は一種類皿いっしきわんの中

つまずいて後振り向く厄落し

二三里を来てみて蓮の料理かな

穴熊の一手女房の居る炬燵

倉田紀子

風呂吹やお国訛りの母のゐて
ひと月は残しておきぬ古曆

冬晴れの休刊日孫誕生す

肉野菜揚げ物煮物毛糸編む

おうどんの出汁は秘伝の里神楽

嫁入りの鏡台に艶十二月

大寺に手足冷えをり間引絵馬

田中静世

冬空に皇帝ダリヤの仁王立ち

金色に又銀色にすゝき原

綿の実のはじけてあふれ真白かな

葛枯れてあらはになりし畑の道

蒲の穂の風を待たずにはじけゆく

選句結果（数字は入選数）

- 6 陸前はあの日のままの古曆
5 穴熊の一手女房の居る炬燵
4 その中に兄の死のあり古曆
3 風呂吹や少し暗めの厨の灯
3 嫁入りの鏡台に艶十二月
2 貫の月赫くオリオン織かりし
2 風呂吹やお国訛りの母のみで
2 マチュピチュの写真残して古曆
2 雪降れり「憂鬱の魚」頭を揃へ
2 葛枯れてあらはになりし畑の道
2 宿坊の風呂吹大根大きかり
2 古曆いまだ明日を残したる
2 蒲の穂の風を待たずにはじけゆく
2 大寺に手足冷えをり間引絵馬
2 哀の家の裏口を問ふ柚子たわわ

多 美 子 紀 子 陽 一 そ ら 静 世 悅 子 空 華 高 志 静 世 紀 子 静 世 多 美 子 紀 子 陽 一 み ち 啓 泰 ハ

- 2 菓食の便りもありて古曆
2 核家族書込み多き古曆
2 繰り返し百合に止まる冬の蠅
2 小春日の里は静かに鐘響く
2 味噌汁を少し濃い目に師走かな
2 優先席マスクの白く浮びをり
2 無残やな土間に三日の古曆
2 積読の壁のいつまで古曆
1 風呂吹きやうかぶ山河の佇ひ
1 枯蓮の淵にさゞなみモアレ出づ
1 風の日は酒と風呂吹猫友に
1 里踊りしまひて帰る冬の橋
1 肉野菜揚げ物煮物毛糸編む
1 二三里を来てみて蓮の料理かな
1 数日や明日待たるわらべうた
1 数日への餡パン二つ余計に買ふ
1 をみならの黒き靴下降誕祭
1 吊るされて塩鮭乾ぶ越の国
1 ゴンドラを唄ふ醉狂十二月
1 朝ぼらけ沼地這ひたる霜の声
1 いつまでも刺さる棘あり開戦日
1 風呂吹やヒッグスしゃつくりNHK

陽 一 敏 子 弥 栄 子 多 美 子 紀 子 空 華 孝 三 啓 泰 高 志 静 世 悅 子 空 華 孝 三 紀 子 空 華 朝 一 高 志 多 美 子 紀 子 空 華 孝 三 啓 泰 高 志 静 世 悅 子 空 華 孝 三 紀 子 空 華 朝 一

ふとん干す上にかまきり日向ぼ
1 1 1
煤逃げのばつたり隣る齧付
皆既月食明けて初霜下締は
風呂吹や月食既に進みをり
冬の暮塔婆傾ぐや寺領堀
独り居の偽り残る古曆
風呂吹や窓の曇りも温かし
風呂吹や味噌は一種類皿の中
ひと月は残しておきぬ古曆
雨戸開け八つ手の黄葉と寒椿
。持ちて書くもの忘する年の瀬や
古曆今年よき事何と何
つまずいて後振り向く厄落し
湯の宿の風呂吹海老の色添で
冬晴れの休刊日孫誕生
冬空に皇帝ダリヤの仁王立ち
葱買ひて優先席も空いてをり
加賀干菓子炬燧に食めり女客
古曆予定書込み少し減り
柿よりは米に群がる雀らは
冬陽浴び桜老木鮮化粧
おうどんの出汁は秘伝の里神楽

陽也 孝三 みち 陽一 彰一 リ
陽也 啓泰 そら 紀子 陽也 みち 陽也 静世
陽也 啓泰 そら 紀子 陽也 みち 陽也 静世
陽也 みち 陽也 みち 陽也 静世

一句一句鑑賞（9号分）

飯田孝三

レモン搾れば秋の蚊がまだ飛ベリ
レモンを搾つたら、あら、秋の蚊がとんで来た。もうい
ないと思ったのに、レモンの鮮烈な香りに活気づいたのだ。
「搾れば」、「飛ベリ」の呼応が小気味よく、一句の
リズムを弾ませる。加えて、上中の頭脚韻を含む六a母
音の繰り返しがそれを際出立たせる。さらに、四濁音が
蚊の翅音さえ運ぶ。「搾れば」は瞬間の感知。日頃は煩わ
しい、蚊の生氣回復をいとおしむようだ。身近な些細を

彰一 空華 静世

冷めてから風呂吹つく飲んだくれ
風呂吹の熱々なるを吹いて食ふ
綿の実のはじけてあふれ真白かな

古曆老子の言える芻狗なり
すうく

金色に又銀色にすゝき原
聖護院なる風呂吹を大皿に

年末のクラフト今年もできそこない
月蝕を冬の一等星囲む

陽也 静世
陽也 静世
陽也 静世

平易に詠んで奥が深い。それは他の一句についても言える。

冬日さす一人遍路は靴を履き

弥栄子

お遍路さんは、今も草履履きかな、それともスニーカー？靴履きはあるまい。ところがこの句の主は靴履き。きっと普通の革「靴」だ。なんとも奇妙。そこが句の“さわり”である。「一人連れなどもあるだろうが、一人遍路である。遅参の秋遍路だろう。「冬日さす」が意味深長。先頃退場した、宰相役になぞらえるのも一興だが、その場合、中七は「遍路一人」もある。

西の市仲見世早く店を閉め

陽也

筑波キスプレスが開通してから、浅草の人出が大分戻った感じがする。以前は、大通りの店も軒並み6時頃には閉めていた筈だ。仲見世の店仕舞いはとくに早かつた。この頃ではそんなことはない。それにしては今日の仲見世は早仕舞いだな。そりやそうだ、今日はお西さま、そちらに総出である。下町が賑わうのはいい、殊に浅草が。江戸文化の名残がある。来年五月にはすぐ川越しにスカイツリーもオーブンする。

故郷の東京にみる鰯雲

多美子

秋の雲、とくに鰯雲は郷愁を誘う。最近知ったのだが、「望雲」という言葉がある。「雲を望み見る」、「子が他鄉

で故郷の親を恋慕う」と（大終館『新漢和辞典』）つまり望郷の同義。東京に生れ、育てば故郷は東京。望雲の情とは無縁か。鰯雲のかなたに何を見ればいいのかな。ふと思い出した、子供たちが小学生の頃、友達が毎年夏休みに親の田舎に泊りに行くのを羨ましがつたのを。私ども夫婦の故郷も東京とその近郊です。

冬の雨色とりどりの合羽の子

敦子

冬の雨とカラフルな合羽の取合せが奏功。最近聞かなくなつた「合羽」が決まる。／＼アメ／＼カツ／＼の三a母音が不思議に響き合い、彩りが一段と映える。レインコートでは句にならぬ。また「とりどりの」がいい。子供たちの動きが目に見えるのだ。仮に「さまざまの」、「いろいろの」ではレポート、句が萎む。明るい冬の雨の光景が楽しい。

新海苔や高架かぶさる日本橋

孝三

新海苔と日本橋との取扱いは、まるで広重の浮世絵をみているような江戸情緒だけれど、ここに高速道路が被さっている。これは悪しきバブル経済の遺物であり、最近それを復元しようという声も聞く。「かぶさる」の措辞が秀逸で、一語であのちぐはぐな暗い

増田陽一

景が見えてきて、ひとつ文明批評のようである。

藩校の床に軋みや鳴高音

この藩校は、鶴岡市の致道館と聞いた。城下町に残つた古建築の廊下が軋む。鳴の声も最近聞かなくなつたけれど、ここではよく徹りそうである。鳴高音はまるで過ぎし日の厳格な師の声か、また声高な子弟の声か、緊張感のあつた教場の残響の如くである。周到な材料による密度のある句である。

秋蝶の低く翔ひたる磯回かな

いそみ
磯回は磯に沿つて行き巡ること。また、海辺の入り込んだところ、と辞書にある。ここでは磯をある手いて、秋蝶が低く飛ぶのを見た、ということである。磯の波すれすれに飛ぶ蝶は危うい美しさで、海の色との対照で斑紋が鮮やかに見えてくるようだ。何蝶であろう。原つぱを花野と思い立ち止る

啓泰

花野の季語で連想するのは、高原で桔梗や女郎花や松虫草などの咲き乱れる、日常から離れた場面を連想するけれど、作者は身近の空地に草の茂つて居るのを美しいと感じて、しばし見とれたのである。「美は到る所にある。しかしそれを発見するには詩人の目を必要とする。」とか、詩人であったJ. H. ファーブルも言つて居たよ

うである。

一句一句鑑賞(十号分)

紀子

黒田彰一

風呂吹やヒッグスしゃつくりNHK

高志

風呂吹を食つていたところ、しゃつくりが出て止まらない。そこへNHKが「ヒッグス」のニュースを突然流したので、驚いた作者のしゃつくりは急に止まつた。

ヒッグス粒子は質量の起源と云われ、来年にもその存在が確認されれば、素粒子物理や宇宙物理に新展開を呼び起すとか。物理学上の「大予言」とされ、実証すればノーベル賞級らしい。風呂吹より以前から存在していたことになる。「風呂吹」と「ヒッグス」と云う全然別世界の物質の対比の妙。お堅いNHKが下ろに落ち着いて居座つて決まつた。

風呂吹や月蝕既に進みをり

飯田孝三

陽一

昔は風呂吹を凍える手に吹きふきいただいた。人の情が、殊更、はらからぬ情が身に入みる。さて掲句、湯気と息どが立ちこめる。有機の坩堝の生吹きが無機の果て、月世界に飛揚する。双眼鏡の筒中で地と空とが相響く(作者は双眼鏡で月食を窺く)。さわりは「進みをり」。例

えは「始まりぬ」と比べれば自明、月食の興味に止まる。掲句は、地の悲喜交々の人間劇と、刻々渙る月食の時空を抱える。「既に」に胸懐の深さ。「をり」はその諾い。「風呂吹」は大凡の類句類想を容れぬ一句である。

嫁入りの鏡台に艶十一月

今世紀結婚事情の変り様は甚だしい。その象徴に嫁入り仕度がある。大体、「嫁入り」なんていわない。嫁入りは昔、女性一生の大事故だった(今も?)。異論の向きはそれはそれ。さて、十一月、その年、いや越し方をふり返る。両親思い入れの三面鏡を開いてふつと思う。新婚の日々のあれ、これか、はたまた、なにを。鏡の艶は今変らない。十七音の真ん中、「に」が妙。臍である。仮に「の」なら、リズムは揺らず艶が曇る。艶「める」ところ文化が栄える。

皆既月食明けて初霜下総は

一句を背負つて立つ「は」がぴたと決まる。大技を揮つた鉄棒の着地が成る(とく。それを 簡すのは「皆既月食」もたら)

の漢字列の象とその七音のひびき、それに直後半拍(そう読む)の呼吸だ。大回転頂上の刹那である。因みに「月食の」なら、気がぬける。さて「は」の心、この地に来て二十年(?)になる、下総の愛着と重ね来た日々への感慨を見てとる。晴れば、筑波富士が見える。月食の暗みと

霜のきらめきが響き合い、「初霜」の氣韻がこれを際立てる。上中のk, i音、中下のs, a音が印象的だ。ハツシモシモオサハの踏韻が身に入る。

をみならの黒き靴下降誕祭

空華

「黒き靴下」といえは女学生のそれ。女子学生ではない。昭和の女学生だ。「をみなら」が雅。慎ましく、凜と矜持ある所作を思う。靴下は無論ストッキング。「降誕祭」は神への献辞。をみならは異土の神にも敬虔の念を失わなかつたのだ。聖歌の齊唱が聞えてくる。小磯良平描く絵を連想した。さあ、黒靴下だったかどうか。ところでサンタの小父さんの贈物も「靴下」の中。こちらはソックス。近頃は抱えきれないほどだから、よい子たちは、はて、信じるかな。(右は、昭和は餓鬼の掲句鑑賞。因みに「朽生まれの連れ合いに訊したら、生徒会で衆議一決、黒ストッキング廃止、以後ホワイトソックス。野球の話ではありません。)

古暦風に吹かれて所在なし

彌榮子

光成高志

本来は、年が改まつてのち、前年の暦を古暦というのだが、十一月もおしまつて新しい暦がくると、使用中のものは古暦という感しがする。暦には、日暦といつて毎日はぐのや、ひと月ごとにばく月暦、一年の七曜表が一枚に

刷り込んであるものなど色々ある。掲句は、月暦である。あと一枚になった十一月の数々日の一日の室内の齣とみる。窓の開けられた部屋に掛けた月暦が所在無く風に吹かれている。時折、捲れて壁に擦れ音をたてていたりする。もう、新暦が後ろに掛けられているかもしれない。もう直ぐ、お払い箱の古暦を見れば、すずろにものあはれなりという感慨が湧いてくる。

ハガキ句第十報

飯田孝三

歌留多読む声の訛を正されて

高志

和氣藹々、カルタに興ずる一家団欒の情景が彷彿する。下五に描く「訛を正されて」が手柄。読み手、取り手の弾む声が聞こえる。訛を正すのは子供たちで、正されるのは、年配の主だろうか。めでたい正月の風景である。ほれぼれと、はれやかな気分になる。しかも、奥が深い。それは、とりわけ、「訛の語のもつ“ふくらみ”からくるのだろう。用字に、リズムに、巧まず、配意がいきとどく。「～読む」で軽く切り、一気に読み上げたい。座五はすぐ上五にたち返り、歌留多はいよいよ賑やかにつづく。「～されて」の弾みと、「訛の“ふくらみ”の温みを見逃せない。正月の「めでたさ」の意味合いを改めて考え

ハガキ句第十報(06・1月)

石積や一条冬の薦紅葉
プリンセス・ミチコ一輪冬の薦薇

秋深し人肌と云ふ甘きもの

遠富士のうしろに落ちし冬日かな
みどり児の双手が冬日握りけり

妙子 湖秋 たか子 孝三
哲男 和弘 ひろし

読初の和泉式部日記ひらく
神の地球万経帰一淑氣満つ

髭うれし黄門様と飾り海老

初景色三間先に潜く鶴も

年を経て米寿の初日島に見る

人間でいたら来た来たお正月

歌留多読む声の訛りを正されて

虎童子 園子 ひろし
美清流 高志 敏子

させられる。17.音の語順を変えただけで、この韻文がこんな豊かな伝達性、起想性をもつ。俳句は何と奥深い文芸なんだろう。

獅子舞の太鼓に暴れ笛に寝ぬ

敏子

幼い頃、目に刻んだ獅子舞の光景が蘇る。その所作、挙動の始終がありありと見える。観察が確か、表現に隙がない。「（）暴れ（）寝ぬ」の連用、終止の重ねに、舞いが躍動し、「寝ぬ」の余韻が伝統の民俗文化のふくらかな記憶を振り覚ます。仮に、「寝る」だったら、只、囁き吟でそれきり。結「寝ぬ（いぬ）」の文語表現が“いのち”である。

「いぬ」の音色は民族の“（）ニス”“（）だらう。“（）暴れ

で半拍おき、読みたい。ぼくの田舎では、毎年、松の内に、獅子舞が各戸にやつてき、座敷で舞つた。恐ろしげな獅子頭を掲げ太鼓と笛に合わせて踊る姿は、猛々しく、又、愛嬌あふれる。大抵の幼子は、厄除けの“頭噛み”の仕種に泣きだす。なんといっても、座巻は、足元に蹲り、両耳を伏せて這いつくばる姿態だ。いじらしく、ユーモラスである。その頃、村の舞い、笛の名手は、誰々の父ちゃんだ。偶々、実家で獅子舞に見えた時は、どれも幼友達だつた。もう、四〇年も前になる。母も兄夫婦も健在だった。

人間でいたら来た来たお正月

美清流

解脱。大人の風も。作者の面目躍如。「人間でいたら」が臍。懐深く、難解。そこに、「来た来た」の囁き言葉を配した。

「お正月」と、軽妙に切りあげる、自在の呼吸が心憎い。

仮名づかいも現代表記で一貫させ行き届いている。臍のほぐし方によつて、面白みも、渋みも。「まあ、そこはかやつているうちに、又々、正月だ。」やや、斜に引いた、自足、自笑、年輪の句である。一茶の一句に通底するか。

犬吠の風やわらかに四温晴

哲男

波と風の犬吠にもこんな日和があるのだ。「やわらかに」の修辞が生きている。四温晴に開く心が伝わる。

初景色三間先に潜く鶴も

ひろし

初景色の広がりに目の前の鶴を配したといふがミソ。氣負いのない、正月、めでたさの句。

読初の和泉式部日記ひらく

和弘

座「ひらく」が利き、正月のめでたさを伝える。ただ、ぼくの不勉強のせいでの「和泉式部日記」との配合が、はたと響かない。

神の地球万経帰一淑氣満つ

園子 司

淑氣ひたすらの一句。「帰一」に渗む一途さが、“いのち”だらう。

年を経て米寿の初日島に見る

措辞あげてめでたい。でも、削ぎ方があるのでないか。

遠富士のうしろに落ちし冬日かな
同じく、削ぎようがあるだう。

湖秋

お便り広場（到着順 敬称略）

前略 彩基金戴きました。ご芳志誠にありがとうございました。「俳句と写真」の会で行つてきました。今年は写真のようになります。今年は十月と十一月の二回赤沢に吟行会と紅葉は全く駄目でした。小生も今は甲状腺癌治療の為、中伊豆のラジコウム温泉に毎週通つており、今年のところ小康状態なのでこの調子でゆけばと思つております。今年も早いもので後ひと月になりました。お体を大切にご健吟ください。簡単ながら御礼まで。草々

禍つ年櫻もみぢの焦茶色

(H. 23. 11. 27 平野ひろし)

白金葭十一月号拝受致しました。毎回その充実振りに圧倒されています。石巻はかつて杭をやめて平等に沈下するように平面計画を含めて設計した百貨店を見に行かれたのですか？放射能の測定は中国製はバラツキが大きいと、地震の大きさも日本は気象庁震度階を使用したため、十三日にM9.0、アメリカUSGSは十一日夕M7.9二十時にはM9.0いろいろありますね。益々の御活躍を祈ります。（平23. 11. 28 小山陽也）

ひろし

(H. 23. 12. 02 飯田孝三)

おはようございます。先日は白金葭十一月号をお届けくださいありがとうございました。お札が遅くなりごめんなさい。昨夜多美子さんから電話があり新年会の二次会のおさそひをいただきました。楽しみにしていますので、宜しくお願ひいたします。

手の内に龍の玉あり誕生日の拙句ですが、活字にしていましたら、龍の方が良かつたかも。句を音にして読むことは同様大切なことと気づかせていただきました。ありがとうございました。

光みち様 倉田紀子(H. 23. 12. 4)

「白金霞 第9号いただき有難うございました。早くできましたね。一句鑑賞文、書きかけて居ましたが、遅くなりました。一應お送り致しますので、使えたら使ってください。毎年春の団体展に出す版画が来年は事情があつて一月早く仕上げねばならず、正月にかけて作業するつもりで、ネンガジョウなどと共にもたもたしております。それではまた。(H. 23. 12. 3陽一拝)

寒い日が続きます。皆様如何にお過ごしですか?会費

千円同封 古代は別便にて。相変わらずの駄句。

だん ↗ 亂筆になりました。この前は東京駅で迷子になりました。(こ)までで便箋一枚失敗、三枚目です。その私が俗事中の俗事伯母さんの多人数の分割協議所をつくりています。来年一月頃にはおはる?この前神田の古本屋で単行本三冊文庫二冊で計九百円でした。ですから本はたまりますね。皆様の益々の御活躍を祈ります。小山陽也拝(H. 23. 12. 12)

いつも白金霞をお送り下さりありがとうございます。貴兄のおすすめもあり、小文をお送ります。お役にたてば幸甚です。よろしくお願いします。

(H. 23. 11. 24伊藤一艸人)

前略お誘いの一月二十日の新年会当日、水戸にて梅原

昭男氏のある受賞記念祝賀会があり、既に予約済みで、参加できません。あしからず。それから、うつかりしておりましたが、月々の会費誌代正式においくらかお知らせ下さい。うつかりしておりました。よろしくおねがい致します。(H. 23. 12. 14青木啓泰)

先日はお陰さまで楽しかつた。いつもお手数を煩わして恐縮です。又、丹精された黒豆と銀杏をいただきました。有難うござります。

ぬばたまの黒豆銀の銀杏の包

いよいよ押し詰まり、寒さも募ります。ご夫妻とも御体を大切に、ご健吟ください。今年もいろいろお世話になりました。来年もよろしくお願ひいたします。よい年を迎えるられますように祈りあげます。

(H. 23. 12. 19飯田孝三)

受贈誌 (12月号)

時の日の弔笛定時柩車発つ (H. 23冬号) 駿河岳水
土浦の蔵町焼けて予科練展 (〃) 〃
立冬の声よく通る谷戸の径(あすか通春47)野木桃花
線量を測る側溝木槿垣 (〃) 長谷川嘉代子
蚊帳吊りて昔を今に閉じ込める(〃) 脇本公子
黒松の屈曲くぐり西行忌 (白浪2011刊) 成井恵子
七草やチャイナタウンで粥が出る(〃) 青木啓泰

白樺の滑稽上げて山暮らし（薦86号）

森下流子

峠の村同じ構へ雪囲ひ

〃

鷗の贅伸ばし切つたる後肢

（彩102号）

深雪晴富士樹林帶銀沙灘

（リ）

平野ひろし

出水跡斧鎧ひて黎立

（リ）

平山三郎

柿を剥く皿にことりと種の音

上田とし枝

名句散策（一）—その三—

反三園

あなたなる夜雨の葛のあなたかな

不器男

不器男は、掲句が『ホトトギス』誌初掲弱冠二十三歳、いきなり巻頭（大正十四年十一月号）である。四S始め、錚々たるたる門徒らを退けてだ。「選句は創作なり」と説いた、虚子ならではの慧眼であり、育英ぶりである。なにしろ投句の常連が年に一度か二度ホトトギス雜詠欄に載るのが大変だった時代である。彼の凜質がことさら際立つたのだろう。

虚子以外の現代俳人とその主要作品を知ったのは、昭和二十年代後半に新刊された角川新書の山本健吉著『現代俳句』においてだった。不器男もその一人。掲句には、虚子の「名鑑賞」とともに強い印象を受け、一種、青年のアンニユイ（倦怠）を感じたのを覚えている。平成に入る頃、再び俳句を初め、俳誌、新聞文芸欄などで同音に

旅の「望郷」句と評されるのを知り、納得いかなかつた。約四十年を経、かつて感じた漫るの「アンニユイ」とも違う、遣る瀬ない「憂悶」の情を見ていたのである。既述、夕刊記事が発端で、不器男に関する三の著述に触れ、わが意を語う思いがした。幼児父を亡くし、学業や将来進路など身辺事情に悩んでいたのだ。「機窓や打たるゝ蝶のはためき来」（不器男）に彼の煩悶のすがたを見る思いがする。「望郷」は、実は、そんな末子不器男を何かと気遣う老母を思いやる心だったのである。不器男句は的確な描写と万葉ぶりで知られる。的確描写については、先に高志さんが代表句「白藤や」、「麦車」を持つて紹介された。万葉調は、秋桜子らに先駆け、不器男が俳句に採り入れたという。掲句のおおどかな韻きもまさに宜なるかな。

ところで、葛に關わる母子、男女など人の情愛をめぐる古歌、説話は少なくない。万葉その他の古典に親昵した不器男である。帰仙の道すがら、車窓に夜雨に打たれる葛を見るにつけ、家郷の老母をことさら思いやつたことだろう。単なる囁きの叙景句ではない。「私の気持ちとは違う」、「ダブルイメージである」と述べた彼の胸中が見える。「不器男は目に見える外界の風物を自分の内面の

映像としてとらえなおそとした」（飴山實「芝不器男」とその俳句」。「情懷の写生」といわれる所以である。

（註）飴山實編『芝不器男句集 麦車』扉裏所掲の短冊句。

機窓や打たるゝ蝶のはためき来

不器男

（平23・12・09）

お詫び、先月号の名句散策（二）の文中、中ほど、「そもそも、」の次に、「不器男を旅人になぞらえるのは無理である。件の夕刊記事がきっかけで、」を脱落させました。お詫びして、挿入をお願いします。

十一月の俳句カレンダー

伊藤一艸人

俳句をやつている知人から毎年俳人協会の俳句カレンダーを送つてきて下さる。居間に掛けて楽しみながら重宝しているが、十一月は次の一句の短冊である。

余生とは一人三脚花ハツ手

水原春郎

集へるは俳のバツカス神の留守

辻田克己

一句ともやゝ身につまされる句で、秋桜子の「子息もはや余生を詠むお年になられたのかと思つて調べてみると、春郎氏は大正十一年のお生まれ、私より四歳年長で私の認識不足で、とうに米寿もこえられて余生もいいところ。正に余生を大切にされて、俳句のため、又、馬酔木誌のため一層のご活躍をと、認識を改めた次第であつ

た。一句目の「俳のバツカス」の句にはいたく感じ入った。私もだらしないバツカスで、句会のあとの呑み会は何時もすすんで顔を出しているし、お誘いがない時は自宅のある駅近くのカウンターでジョッキを傾けて帰る。作者の克己氏もきっと神の留守にあらずとも酒杯を離すことのない方と思われる。でも、この句は神の留守に集うバツカスで絶妙の俳味が溢れている句で、いたく感銘した。私も含めてのバツカス連中、是非百葉の長の酒であり度い。カレンダーもあと一枚、十二月を残して今年も終る。ちなみに師走の句は

昔より聖者は瘦せて枯芭蕉

の句である。

（H. 23. 11. 24）

鷹羽狩行

我孫子日記

11／18例会。11／23一葉忌、九段坂イタリヤ文化会館。11／25猿ガ京。11／30SOA。12／4青戸。12／6銀座。12／7放射線量測定。12／9両国。12／16例会。

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、

評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴し製本型で編集しますので、先の要領にて原稿をお寄せ下さい。多ければスックして順次掲載します。

編集後記

我が畠の二回目の放射線量測定値は下の図のようでした。地上1mの位置の値です。地面ではこれより大きくなりますが、皆0.3以下でした。ある屋敷内の雨垂れの在る地面や落葉の溜る位置で高い値が測定されました。場所により予断を許さぬということです。

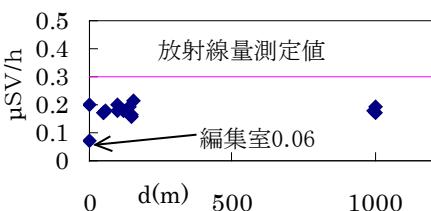
さて、今年はそういうことで、地震・原発事故による放射能汚染があり、憂鬱な気分のまま暮れて行きます。しかしながら、俳句文芸は季感を通して心の交流が出来ますので、青々とした青野を歩いている如き感概があります。ともかくも、良きお年をお迎え下さいませ。来年も宜しくお願ひいたします。

白金蔵 第10号 平成二十三年十一月発行

編集・発行人 光成嵩志(FAX ○四一七一八七一〇六八)

発行所工二七〇一 一九我孫子市南新木一十四一十七

表紙の題字 嘉悦翠三。写真は白金蔵



彰一英語俳句

My HAIKU

Deep frost.
laundry hung up all night
are hardening white

Teacher's correction

Deepest frost
laundry hung outside
hardens white

Teacher's comment

Yes, I quite enjoyed this one. Did you
see a similar version in the Asahi
Haikuist Network ? Bravo !